様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２２４３０４２

研究課題名（和文）東アジアにおける惨事ストレスに関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on the critical incident stress in East Asia

研究代表者
松井　豊（MATSUI, YUTAKA）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：６０１７３７８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　35,000,000円、（間接経費）　10,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本・韓国・中国・台湾の、ジャーナリスト、看護職員、消防職員の惨事ストレスを比較検討することを目的として一連の調査を行った。ジャーナリスト班は、中国調査、韓国調査、東日本大震災（以下震災）における被災地新聞社、大手新聞社・通信社調査を実施した。看護職員班は、新潟中越沖地震の被災施設職員調査、国内病院の調査、震災の被災地調査、台湾調査が実施された。消防職員班は、韓国調査、国内の消防団員調査、消防学校における教育実態調査、震災被災地への派遣職員調査を行った。

研究成果の概要（英文）：To investigate and compare the critical incident stress among Japanese, Korean, Chinese and Taiwanese journalists, nurses and firefighters, a series of surveys has been conducted. The Journalists Research Team conducted the investigation of Journalists working at newspaper publishing companies of the Great East Japan Earthquake stricken area, major newspaper publishing companies and news agencies, and also Journalists in China and South Korea. The Nursing-personnel Research Team conducted the investigation of nurses working at institutions close to the offing of Niigata Chuetsu earthquake, hospitals of the earthquake disaster stricken regions and non stricken regions, and also nurses in Taiwan. The Fire-fighter Research Team conducted the investigation of the domestic volunteer fire-figthters, the curriculum fact-finding survey at fire-fighting school, personnel to be dispatched to an earthquake disaster stricken area, and the fire-fighters of South Korea.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学　社会心理学

キーワード：惨事ストレス　東アジア　ジャーナリスト　看護職員　消防職員　自然災害

１．研究開始当初の背景

惨事ストレスの研究とケア実践は、Mitchellによって行われた消防職員へのグループミーティング（Critical Incident Stress Debriefing: CISD）を嚆矢とする。惨事ストレスケアには各国の文化にあわせた改良が必要と考えられた（松井, 2006）。また、職種によっても、ストレスの原因（ストレッサー）やストレスケアのあり方が異なるものと予想された。

消防職員に関しては、日本ではグループミーティングを基盤にした惨事ストレスケアが消防や陸上自衛隊や海上保安庁で採用され、その有効性も確認されていた（東京消防庁活動安全課他, 2007）。一方、韓国では1999年から外傷性ストレスに関する研究が始まっていたが、消防職員に対する惨事ストレスケアの実践は始まったばかりであった。

ジャーナリストに関しては、われわれが報道関係者への面接と質問紙調査を実施し、日本においてもジャーナリストに惨事ストレスが見られることを確認していた。韓国ではジャーナリストの惨事ストレスに関する研究はこれまで行われておらず、中国では四川大地震の報道に関する報告が最近発表された（陶文静他, 2009）のみであった。

看護職員は、われわれが新潟県中越地震後(2004年, 2007年)に質問紙調査を実施し、被災後の看護職員に一定のストレス反応が生じることを確認した。また、日常的な看護活動の中で、看護職員が患者から暴力を受けており、その心身への影響が大きいことも明らかにした(三木,2009)。しかし、韓国や中国における看護職員の惨事ストレスについては研究が認められなかった。

以上のように、日本における惨事ストレス研究と実践に関しては消防職員に関するものが先行しており、ジャーナリストや看護職員においては実態調査が行われるにとどまっていた。中国と韓国では、いずれについても未開拓な研究分野であった。そこで、日本、韓国、中国の３種の災害救援者の惨事ストレスの研究を行うこととした。

２．研究の目的

東アジア3カ国（日本、韓国、中国）における惨事ストレスの実態を把握し、東アジア地域の文化風土に適した惨事ストレスケアシステムを構築することを目的とした。 しかし、初年度末に東日本大震災（以下震災と略記）が発災し、国内の災害救援者に強いストレスが生じることが予想されたため、そのストレスの実態把握やケア（啓発活動も含む）も目的に加えた。

３．研究の方法

研究は、ジャーナリスト班、看護班、消防班に分かれて展開した。

（１）ジャーナリスト班

①中国のジャーナリスト（テレビ・新聞）の惨事ストレスに関する現地面接調査　平成22年

②中国のジャーナリスト（新聞）の惨事ストレスに関する質問紙調査（訪問留め置き法、中国４都市）　平成23年３月

③震災被災５県の地元新聞社記者に対する震災による惨事ストレスの実態調査。面接調査と質問紙調査　面接は平成 23 年８月～24年２月（18名）、質問紙調査は平成24年２～３月（120名）

④大手新聞社・通信社の記者に対する震災による惨事ストレスの実態調査　質問紙調査（150名）　平成24年６～８月

⑤韓国のジャーナリストの惨事ストレスの実態に関するweb調査　平成25年９～10月

（２）看護職員班

①新潟中越沖地震の被災介護施設職員に対する惨事ストレスの実態調査の解析

②岩手県・宮城県の被災病院に勤務する看護職員への震災による惨事ストレスの実態調査　面接調査と質問紙調査（平成 23 年８～９月、407名）。

③福島県の被災病院に勤務する看護職員への震災による惨事ストレスの実態調査　面接調査と質問紙調査（平成24年９～11月、401名）。

④台湾の看護職員の日常的な業務に伴う惨事ストレス調査　（平成25年12月～平成26年3月、300名）

⑤震災被災地で被災者を支援している保健師、歯科衛生士、栄養士に対するストレスケア研修の実施と効果測定

（３）消防職員班

①韓国の消防職員に対する面接調査（11 名）平成 22 年

②消防団員の惨事ストレスの実態調査（456 名）　平成 22 年

③消防学校における惨事ストレス教育の実態調査（全消防学校）　平成 22 年

④韓国の消防職員に対する web 調査　平成 23 年

⑤震災被災地に派遣された消防職員に対する惨事ストレスの実態調査　23 年６月

（４）その他

国際班はすべての海外発表の支援を行った。

４．研究成果

研究成果は学術雑誌論文 12 件、学会発表 38 件、図書 5 件にて発表され、現在も数件の投稿論文が審査中である。研究成果は多岐にわたるため、主要な知見のみを紹介する。また、以下の①②などの番号は、研究方法の見出し番号と対応させている。

（１）ジャーナリスト班の主な研究知見

①②中国ジャーナリストの面接調査・質問紙調査

中国のジャーナリストに対する面接調査では、ジャーナリストの惨事ストレスの存在が確認された。質問紙調査では、回答者全員が何らかの衝撃を受けた災害や事件や事故の経験を有していた。心的外傷後ストレス症状を測定する IES-R（改訂版出来事インパクト尺度）の中国語版を用いて、中国語版の 35 点以上のハイリスク者の割合は、9.6%であった。

③東日本大震災の被災５県の地元ジャーナリスト調査

被災５県に本社を持つ新聞社のジャーナリストに対して面接調査を行い、質問紙調査が実施された。質問紙調査の回答者の 7 割以上が「取材対象に対する接し方について悩んだり、あるいは苦労した」経験を有していた。約 9 割の回答者が取材後に何らかのストレス反応を自覚していた。IES-R 日本語版を測定したが、Asukai et al.（2002）において PTSD ハイリスク者の基準とされている 25 点以上の者の割合（ハイリスク率、以下日本語版は同じ）は，22.4%に達していた。

④大手新聞社・通信社のジャーナリスト調査

被日本全国に取材網をもつ新聞社・通信社計４社で被災地報道に関わったジャーナリストに質問紙調査を行った。回答者の約５割は「被災地とそうでない他地域とのギャップに強い違和感を持った」経験を有していた。IES-R のハイリスク率は、12.7%であった。

⑤韓国ジャーナリストの web 調査

韓国の新聞社やテレビ局に勤めるジャーナリストが、精神的に衝撃を受けた事案で受けた衝撃を、IES-R 韓国語版で測定したところ、25 点以上のハイリスク率は 15.0%で、新聞社よりテレビ局の方がハイリスク率が高かった。

⑥その他

東日本大震災の発生により岩手県災害対策本部医療班や新聞労連の依頼に応じて、ストレスケアに係わるパンフレットや文書を公表した。また、ホームページを充実させ、被災地で活動するジャーナリストや消防職員やボランティアなどへの、メンタルケアのあり方を説明する啓発パンフレットを公開した。また、平成 25 年 11 月の国際トラウマティック・ストレス学会で、ジャーナリスト班を含む報道人ストレス研究会（代表：松井）のこれまでの活動に対して、Frank Ochberg Media and Trauma Award が授与された。

（２）看護職員班の主な研究知見

②岩手県・宮城県の被災看護職員調査

震災の被災２県（岩手・宮城）の病院に勤務する看護職員へ面接調査と質問紙調査を行った。質問紙調査では、「当時のことを思い出して不安になる患者がいた」などの患者ケアでの苦労が多く見られた。ISE-R のハイリスク率は 33.7%と極めて高かった。回答者の精神的健康状態が危惧されたため、この結果を回答者にフィードバックするとともに、プレスリリースし、岩手県達増知事に面会して被災地看護職員へのメンタルケアを依頼した。

③福島県の被災看護職員調査

福島県浜通及び中通りで被災した看護職員への質問紙調査を行った。「放射線の影響を懸念する患者がいた」などの苦労を体験する回答者が多かった。IES-R のハイリスク率は 38.4%と極めて高かった。被災地看護職員のストレスケアの必要性を感じ、福島県と岩手県の看護職員を対象にして、ストレスケアを目的とした研修を行った。

④台湾調査

台湾の 2 病院の看護師 300 名に惨事ストレス調査を実施した。IES-R のハイリスク率は

45.1%と高く、「患者の身体的暴力」、「家族の身体的暴力」、「職員の身体的暴力」「患者の暴言」「職員の暴言」の経験者が有意に高かった。同質問紙調査における日本の看護師の結果と比較すると、IES-R のハイリスク率は高かったが、患者の自殺などの経験よりも患者・家族・職員からの暴力による影響がある点では同様の傾向が示された。

⑤被災者支援者へのストレスケア研修

被災地や避難先で、被災者を支援している保健師、歯科衛生士、栄養士を対象にしたストレスケア研修を、３回開催し、研修の効果を測定した。研修は心理教育と震災の振り返り、互いが支援の中で苦労している点や工夫している点の意見交換などで構成された。一定の研修効果が確認された。

（３）消防班の主な研究知見

①④韓国消防調査結果

面接調査では、衝撃だった現場経験やストレス解消法については、日本の消防職員と類似した回答が得られた。しかし、ストレス症状において過覚醒の症状が多く挙げられ、組織への要望対策について第三者を通した秘密保障のできる心のケアシステムを求める意見が挙げられ、日本の消防職員との相違が窺われた。

web 調査結果では、最近 10 年間現場活動によって何かの衝撃を受けた人の比率は 87%であり、最も衝撃的だった事案の経験による IESR のハイリスク率は 29.2%であった。要望対策については、「殉職や職務上障害に関する補償システムの改善」、「職員のストレスに対応する専門機関が必要」、「匿名性の保証できるケアシステムが必要」などの要望が高かった。

②消防団調査

過去 10 年間のうちに衝撃的な災害を経験したことがある者は、有効回答者の 68.8%であった。衝撃的災害経験者の IES-R のハイリスク率は 3.9%であった。衝撃的な現場活動後に生じた急性ストレス反応と、調査時点での IES-R 得点との関連を検討し、消防団員の急性ストレス反応の測定に基づく「PTSD 予防チェックリスト」を提案した。

⑤東日本大震災緊急消防援助隊調査

衝撃を受けた災害現場での身体的・精神的な反応について尋ねた項目をみると、回答者の 9 割に凄惨な現場での活動がもたらすストレス反応が生じていた。中でも、「被害者や、被害者の家族に強く同情した」や「もっと役に立てないのかと自責の念にかられた」が多く回答された。IES-R ハイリスク率は、5.1%であった。活動中の支えとなったこととしては、「一緒に活動している上司や同僚と、他愛もない会話をよくした」などの同僚や上司との会話が上位に上がっていた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１２　件）

①兪 善英、松井 豊、畑中 美穂、都市部の消防団員における家族に対するストレス開示抑制態度とソーシャルサポートが精神的健康へ及ぼす影響、対人社会心理学研究、査読有、13 巻、2013、49-57

②山崎 達枝、被災しながら業務を遂行した看護職への惨事ストレスの支援、産業精神保健、査読無、21 巻、2013、4-8

③福岡 欣治、髙橋 尚也、井上 果子、畑中 美穂、ジャーナリストの惨事ストレス対策－東日本大震災を報道したジャーナリストの支援－、産業精神保健、査読無、21 巻、2013、18-23

④松井 豊、立脇 洋介、兪 善英、消防職員の惨事ストレスケア－惨事ストレス研修と危機介入システム－、産業精神保健、査読無、21 巻、2013、24-30

⑤畑中 美穂、松井 豊、兪 善英、惨事に出場した消防団員の急性ストレス反応、筑波大学心理学研究、査読有、42 巻、2011、43-50

⑥福岡 欣治、畑中 美穂、惨事ストレスから記者を守るために－求められる組織的な対策（特集・大震災に向き合う）、月刊民放、査読無、6 月号、2011、24-27

⑦松井 豊、自分を守り、取材対象者を守る－ジャーナリストの惨事ストレスをどう防ぐか、新聞研究、査読無、720 巻、2011、54-57

⑧畑中 穂、松井 豊、結城 裕也、福岡 欣治、他、ジャーナリストのための PTSD 予防チェックリスト作成の試み、筑波大学心理学研究、査読有、39 巻、2010、57-64

⑨兪 善英、松井 豊、立脇 洋介、高橋 幸子、「消防職員の惨事ストレス研修」のフォローアップ研究－効果の持続性及び実践現況の視点から－、筑波大学心理学研究、査読有、39 巻、2010、65-72

⑩結城 裕也、畑中 美穂、福岡 欣治、井上 果子、他、新聞シャーナリストにおける職務上の自己開示－職階からの検討－、東洋大学大学院社会学研究科紀要、査読有、46 巻、2010、51-72

⑪福岡 欣治、井上 果子、松井 豊、安藤 清志、他、新聞ジャーナリストにおける日常の職務ストレスとソーシャルサポート－基礎的分析－横浜国立大学教育相談・支援センター研究論集、査読有、10 巻、2010、97-118

⑫丹野 宏昭、山崎 達枝、松井 豊、山影 有利佐、2007 年新潟中越沖地震の被災介護施設職員のストレス反応、日本集団災害医学会学会誌、査読有、16 巻、2010、19-26

〔学会発表〕（計３８件）

① Miho Hatanaka, Seonyoung Yoo, Yutaka Matsui Post-traumatic stress and coping of firefighters working in areas affected by the Great East Japan Earthquake. *The 29th Annual Conference of the International Society for the Study of Trauma and Dissociation (ISSTD)* 2012 2012.10.20 Hilton Long Beach(USA)

② Takahashi, N., Fukuoka, Y., Ando, K., Matsui, Y., Inoue, K., & Hatanaka, M. Critical incident stress of journalists that covered The Tohoku Earthquake: Report of intervention and survey results by Journalists' CIS Research Group. *2012 Annual Convention of Korean Psychological Association* 2012 2012.8.24 Elysian resort in Chuncheon(Korea)

〔図書〕（計５件）
①松井 豊、荒添 美樹、伊藤 まゆみ、他、サイエンス社、生涯発達の中のカウンセリングⅣ　看護現場で生きるカウンセリング、2013、276
②横山 須美、山下 俊一、山口 英樹、広瀬 弘忠、松井 豊、（財）日本防火・危機管理促進協会、東日本大震災に対する危機への対応、2013、106
③藤森 立男、矢守 克也、福村出版、復興と支援の災害心理学、2012、307（松井豊 支援者の惨事ストレス対策と支援　65-86）
④報道人ストレス研究会（編）（代表：松井豊）、現代人文社、ジャーナリストの惨事ストレス、2011、167（福岡欣治、安藤清志、畑中美穂、井上果子執筆）
⑤山崎 達枝、松井 豊、他、荘道社、災害時のヘルスプロモーションⅡ～減災に向けた施設内教育研究・訓練プログラム～、2011、315

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.human.tsukuba.ac.jp/~ymatsui/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
松井　豊（MATSUI・Yutaka　）
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：60173788

(2)研究分担者
安藤　清志（ANDOU・Kiyoshi　）
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：　50125978

井上　果子（INOUE・Kako　）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：10242372

山崎　達枝（YAMAZAKI・Tatsue）
岐阜医療科学大学・保健科学部・非常勤講師
研究者番号：40576063

福岡　欣治（FUKUOKA・Yoshiharu）
川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部・准教授
研究者番号：80310556

三木　明子（MIKI・Akiko　）
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：30315569

髙橋　尚也（TAKAHASHI・Naoya）
立正大学・心理学部・准教授
研究者番号：10581374

立脇　洋介（TATEWAKI・Yohsuke　）
独立行政法人大学入試センター・入学者選抜研究機構・助教
研究者番号：50511648

畑中　美穂（HATANAKA・Miho　）
名城大学・人間学部・准教授
研究者番号：80440212

佐藤　宏英（SATOH・Hirohide）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：00598691

竹中　一平（TAKENAKA・Ippei）
武庫川女子大学・文学部・助教
研究者番号：20542707